

教育再生

新芥川賞受賞作の『熊の敷石』を読むつもりで「文藝春秋」三月号を開いたら、二十人による「教育再生『私の提言』』という特集が目に入った。『私たちよ！教師たちよ！』というタイトルに切実な響きがある。

誰の言うこともそれなりに一理ある。奉仕活動を提唱する曾野綾子さんの意見ももつともだし、予備校講師をしている細野真宏氏が、学力の低下を危惧して、勉強というのは「基礎トレ」であってそれ自体が楽しいものではないと言っているのも正論だ。佐藤愛子さんが、ケーキがあるのに安菓子をほしがる孫に腹を立てているのもよく分かる。

みんなが教育のあり方を危ぶんでいる。そしてそれぞれの価値基準で、これではまともに育たないと嘆いている。

本来、何かを学ぶこと、生きていく力を身につけることは本能に属するもので、生きとし生けるものすべてにとって最も重要な行為であるはずだ。熊の母親は仔にマスの捕り方を教える。仔は飢えないために必死で学ぶ。それを身につけることは、とても大きな喜びであるにちがいない。

では今の日本でしっかり生きるためには何を学ぶべきなのか、生きる力を何で計るべきなのだろうか。何をもって、ほんとうの学ぶ力とするべき

教育再生

なのだろうか。

同じ特集の座談会『東大生はバカになったか』のなかで、立花隆さんが教養には知識だけでなく実践的能力も大事だと言っていることに私も賛成だ。論を立て、人をオーガナイズし、情報を利用・応用する力が必要だと。

その通りだと思うが、問題はどうしたらそういう力を育てることができるかだ。

初出：毎日新聞「マガジンラック」二〇〇一年三月
ホームページ掲載 二〇二一年四月